

はじめに

中世の文化・とくに室町期の武家文化を理解する上で、將軍家を圍繞した一群の阿弥者たち——猿樂の観阿弥・世阿弥に音阿弥・道阿弥、田樂の増阿弥、あるいは作庭で知られた善阿弥など、遁世姿の「道々ノ上手共」の存在を看過することはできないだろう。かれらを擁しない公家文化との構造的な違いもそこにあったといつてよい。しかし武家社会においてもっとも特徴的な存在だったという点では、同じく阿弥を称した一群の「同朋衆」たちに及ぶものはなかったと思われる。

同朋衆は、足利義満の頃からふえはじめ、義持・義教をへて義政の時に至り、質・量ともにピークに達する。いまその名を列挙する煩は省くが、毎阿弥・能阿弥・芸阿弥・相阿弥・立阿弥・千阿弥・重阿弥・玄阿弥・南阿弥等々、最初の一字を異にするだけの阿弥者たちが数多くいて、將軍家殿中の雑事に従っていた。その職掌は使い走りといったものから、連歌の宗匠、絵画の国工といわれた者、あるいは唐物の目利きや座敷飾りに長じた者まで、文字通りピンからキリまであって、一樣ではないが、かれらの存在とその文化的な役割を無視して室町文化は語れない。

わたくしが同朋衆について関心をもつようになったのは、この時代に胚胎し成長した、茶や花などのいわゆる生活文化との関連においてであるが、『講座日本文化史』第四巻「中世文化の展開」（昭和三十七年）のなかで同朋衆を取上げたのが最初である。以来文献の蒐集のかたわら、その姿を描いた絵画資料の「発見」が夢であった。

昭和四十五年の夏、京都府文化財保護基金の行なった府下の神社調査に委員の一人としてこれに参加した際、現在京都市東山区五条橋東に所在する若宮八幡宮を訪ねたわれわれの前に示されたのが、「応永十七年八

月十五日從一位將軍足利義持公若宮八幡宮御社參之図」と外題の付された一卷の絵巻物である。当社は源頼義六条左女牛さめがひ（現下京区）の邸内鎮守として清水八幡若宮を勧請したのにはじまるが、天正十一年（一五八三）東山方広寺辺に移され、慶長十年（一六〇五）さらに現在地に移っている。絵巻は六条左女牛にあった時分の若宮八幡宮へ將軍が部將以下を伴なつて社參する有様を描いたものと知れたが、展げるうちに、將軍に扈從する三人の法体者が目に飛び込んで来た——それが、求めて久しかった同朋衆との出会いの一瞬であった。昭和初年京都大学文学部で展示されたこともあったようだから、これが全く世に知られていなかった訳ではないが、しかしその折りのパンフレットの解説には同朋衆について格別言及するところはない。その後私の知る限り、この絵巻物が紹介されたことはないが、おそらくこの絵巻物のそれが同朋衆の画証としては現在までのところ唯一のものと思われる。

以後折あるごとに同朋衆の登場する場面（二ヶ所ある）を紹介させて頂いたこともあって、最近ではよく知られる存在になったと思う。このたび同八幡宮の御好意で、絵巻物全体を印刷に付して公刊できるに至ったことは、私にとってこれ以上の喜びはない。心から御礼申し上げたい。しかし折角の機会を有効に生かすため、畏友である京都国立博物館の下坂 守氏に美術史的・風俗史的な視点をふくめ、政治・社会的な背景のなかでこの絵巻物を検討して頂くことにした。詳しくは同氏の論考にゆだねるが、同氏により応永十七年（一四一〇）八月十五日の放生会に足利義持が社參した時のものとする証拠は見当らないこと、絵画的な観点からももう少し時期を下げるのが適當であること、などが明らかとなり、したがってこの絵巻物も「足利將軍若宮八幡宮參詣絵巻」と称するのが適當であることが分った。私も氏の論証の成果を尊重し、今後は右の呼称を用いるのが妥当と考える。従来の表記（前掲）を改めたゆえんである。

平成七（一九九五）年三月

国際日本文化研究センター

村井 康彦